

◀S·E·L·D·A·A▶ No.17

上智大学英語学科同窓会
東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学英語学科事務室気付

平成5年12月10日 発行

Sophia English Language Department Alumni Association

ASTE も頑張ってます

吉田研作

(英語学科教授, ASTE 事務局長)

日本の英語教育は近年急激な変化(?)を見せ始めている。そして、英語学科卒業生で教職に就いている人を中心に12年前に組織されたASTE(上智大学英語教員研究会)では、その変化に対応すべく、様々な活動を行っている。

現在、中高ではオーラル・コミュニケーションに重きを置いた授業が導入され始めようとしている。また、本英語学科でも大学英語教育改善のための共同研究を行っているが、大学レベルでも、多くの企業の語学研修でTOEIC(Test of English for International Communication)が採用され始めていることを受け、特に大学生協を中心に、大学生のオーラル・コミュニケーション能力育成を図るプログラム設立が話題となっている。

そんな中で、ASTEでは、今年度、文英堂出版から高校用のオーラル・コミュニケーション(A)・(B)2冊の教科書(文部省検定済み)を作成した。Birdland A(会話)及び、Birdland B(リスニング)はNissel, Barry両先生の監修の下、ASTEの研究企画委員全員で作成したのである。ASTEでは、以前にも故Forbes先生の発音教材を基にリスニング教材を作成したが(発音教材も大学院生からなる応用言語学研究会で作成し、どちらも文英堂から出版されている)、今回の教科書作りは、「日本の英語教育に一石を投じる」というASTE設立当初の目的達成への大きな一歩となった。

また英語学科では、今年から過去20年に亘って上

智大学国際言語情報研究所が主催してきたSophia Seminar for High School Teachers of Englishという全国の高校英語教員を対象とした研修会を引き継いだ。ここでもASTEの研究員がスタッフとして活躍している。

今後の日本の英語教育の発展のためにASTEは頑張っています。宜しく願います。なお、SEL-DAA会員の中でASTEの活動に興味のある方は、英語学科にご一報ください。教員でない方も歓迎します。



▲カナダ、バンフのLake Louiseにて

1993年度 BTF 講座春期報告

実社会で活躍している英語学科卒業生の方が講師となり、「英語と社会」というテーマで、現役英語学科生に講義をするというユニークな授業です。以下、今年春期の講師の方々の横顔と講義の内容を要約します。

4月23日

金丸正城氏（昭和47年卒）

ジャズ・ボーカリスト

学生時代からジャズに惚れ込み、軽音サークルに所属し、当時としては非常に珍しかった男性ジャズ・ボーカリストを志す。卒業後2年のサラリーマン生活を経て、現在はプロとして、またジャズ・ボーカル教師として活躍中。ユニークな、そしてプロとしての人生の話に聴講の学生たちは非常に興味をもって聴いていた。講義の後半は、仲間のベーストの山口和与氏の伴奏でライブ演奏となった。学生も手拍子で参加し、教室がライブハウスに変わり、大いに盛り上がった講義だった。



5月7日

清田洋一氏（昭和54年卒）

都立北高校教員

暴走族が真っ盛りだった時代に定時制高校に自ら飛び込み、以後12年間教鞭をとり、教育に情熱を注いできた。清田氏は、いろいろな困難な状況の中で、学校の再建に尽力した苦勞を語った。自分自身の教育に対する目標を熱心に実行してきた結果、自分のアドバイスで生徒が立ち直って感謝の言葉を述べてくれたりすると、日頃の疲れが吹き飛び、教師としての本分と生きがいを感じるとの講義に学生たちは、身につまされるような思い(?)で真剣に聴いていた。



5月14・21日

神田昌典氏（昭和62年卒）

コーポレートディレクション勤務

大学卒業後は外務省に入って2年間の在外研修を New York で受けた。その後、ナイジェリアへ派遣された。ナイジェリアでの経験を通して、国際貢献度や世界の人へ与える影響と英語力とは必ずしも比例しないと痛感。英語学科で学ぶ学生に語学だけでなく国際社会を広い目で見ていくことを学ぶべきであると話した。また、New York 大学経済学士号そして Pennsylvania 大学で経済学修士号を取得。この時の経験からアメリカにおけるビジネススクールの現状なども披露した。



5月28日・6月4日

今泉 恵氏（昭和63年卒）

カラバオ（外国人出稼ぎ労働者と連帯する会）専従職員

大学を卒業した後、日本国際ボランティアセンターでタイ地域開発チームスタッフとしてバンコクに駐在。その後、東京事務所でタイ事業を担当。昨年、退職。現在、カラバオという外国人出稼ぎ労働者と連帯する会の職員として活躍している。実地の経験を通してボランティアのありかた、国際協力・援助の問題点などを語ってくださった。理想だけではやってはいけない厳しい現状を聞き、ボランティアに対する考え方がかりでなく物事全般に対する考え方を問われたという学生が多かった。



6月18日

小池栄子氏（昭和58年卒）

主婦

昭和58年に上智を卒業、日本郵船㈱に入社し、意欲的に仕事をこなしていたが、翌年、当初の希望であった教師となり、神奈川県立大船高校で英語を教える。教員時代は反抗的な生徒にてこずるが、体当りの指導の結果、生徒から「ただ者じゃない」と呼ばれたりもした。

結婚して退職後は西独ファルク財団日本支部のコーディネーターとして活躍したが、現在は主婦業と母親業のプロを目指した生活。経験豊かな内容の講義に、学生達は感銘をうけていた。



6月25日

松島あおい氏（昭和62年卒）

西武百貨店勤務

上智在学中に Missuori 大学に留学、マスコミ論を勉強した。大学4年時当初はマスコミ志望であったが、女性の働ける環境、企画の多様性などを考えて、昭和62年に西武百貨店に入社した。百貨店は様々な年齢層、経験を持つ人が共に仕事をし、企画をたてることを実感。

当初、渋谷 Loft 開店の準備室に配属。翌年の末から Loft の広報部で、新入社員として仕事を覚えながら新しい企画を考えた。平成2年から本社の広報企画を担当。現場の生きた話に、学生は大いに興味をもった。



7月2・9日

武部恭枝氏（昭和53年卒）

会議通訳者・通訳者養成学校講師

上智を卒業後、大学院に進学して国際関係論を修める。現在フリーランス会議通訳者として活躍すると共に、通訳者養成学校の講師として、後輩の育成にも貢献している。

大学在学中から、松尾教授が教えられていた通訳実技のクラスを受講し、通訳の仕事に興味を覚えた。通訳市場、仕事の種類、内容から実践の話まで、スライドやテープを使用し説明、学生に大人の英語への脱皮、教養の向上など自らの経験に基づいて、貴重なアドバイスをされた。



SELNET 報告

SELNET は英語学科同窓会の会員のための人材バンクとしてスタートして、2年目を迎えました。求人と求職の両方の情報をデータベース化し、職種、勤務時間、希望賃金の条件が合った場合、双方に紹介するまでが事務局の仕事です。最終決定はあくまでも当事者間の責任において行われています。今までに求人登録が7社、求職の登録が30人ありました。現在、貿易業務担当者、編集制作コーディネーターの求人があります。関心のある方はふるって登録してください。登録方法についてのお問い合わせは、郵便またはファクシミリで事務局まで。

〒102東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学英語学科事務室内 SELNET 係

FAX03-3238-3910

平成5年度

元 NHK 記者

小林康司 (昭和34年卒)

今年もまた、一年で最も暑い日がやって来た。去年に引き続き被爆した広島で8月6日を迎えた。平和式典の前からテレビ放送を見ているとインタビューを受けた婦人が「生きている限り、原爆にこだわります。」と答えた。一緒に放送を見た父が「戦争に行ったわしが生き残り、広島に居た姉たちが死んだ。」とポツリと口にした。前日、広島ホームテレビが去年放送した『炎の絵』(75分)のビデオを見直した。現在、東京芸術大学の学長や国連親善大使を努めておられる平山郁夫画伯が被爆して34年後に初めて描かれた唯一の原爆関連の作品『広島生変図』にまつわる番組だ。

昭和54年11月19日の中国新聞で大きく取り上げられた記事の中に「生まれ変わる炎、広島の炎を忘れたら、広島の再生はあり得ない。」と書いてある。

自分も被爆して爆風で下敷きになり、救出している炎の中を必死に避難している。ちょうど48年目の6日の午前中、平山画伯と同じ広島兵器廠で被爆された当時の修道中学3年の同級生の方々にお会いして話を聞くことが出来たのは幸いだった。『炎の絵』の番組の中で証言しておられる重要な人達だ。

この日の午後、山口県徳山市の郊外で安沢松夫さん(78)に会うことが出来た。安沢さんは軍用機に上官を乗せて原爆の落ちる10分ほど前に爆心地から3キロ南の吉島飛行場に着陸、地下防空ごうに入ってほんの10秒後に被爆した。外は地獄そのものだった。生きて居る人達に食糧や水などの救援物資が必

要だった。しかし、操縦して来た飛行機の風防ガラスが爆風で壊れただけでなく胴体もバナナのように曲がっていた。午前10時半頃エンジンが掛かったので機体を斜めにしたままの曲芸飛行の状態で飛び続け下関の小月師団司令部まで何とかたどり着いた。小月基地で広島の惨状を説明しても最初だれも信じなかった。

人が苦しんで居るのを見逃す事のできない性質の安沢さんの説得は別の救助機による広島への再度の飛来を可能にした。そして「兵隊さん『水』を下さい」と言った何人かが安沢さんの腕の中で次々に亡くなったようだ。

このような原爆惨禍が二度と起きないように願ひ、当日着用していた飛行帽や靴など展示する手作りの資料館を3年がかりで自宅脇に完成させた。肺気腫を患い酸素吸入器が手放せない安沢さんは当時を思い出しながら話して下さった。別れ際の握手は固かった。

生まれ変わる炎の絵『広島生変図』を陶板焼にするとは色は変化しないとされている。永遠の平和を求める広島が世界に向けての発信基地として太田川沿いに陶板焼を設置したい。何故なら、世界が惨禍を乗り越えた広島を「平和」のシンボルとしているから。

陶板焼を制作、設置するには6か月、およそ3000万円の経費が必要だ。第64回日本美術院展出品の『広島生変図』の陶板焼成功のためご協力をお願いしたい。

連絡先：〒226 横浜市緑区三保町2640-79

☎045-934-6954 小林康司



▲筆者(左)と安沢氏(右)



▲安沢陸軍少尉(当時)の飛行帽と靴

米国雑感

在米日本大使館勤務
佐藤英夫（昭和47年卒）

ワシントンに着任した当時は一年後に控えた大統領選挙のキャンペーンが始まっていた頃で、共和党、民主党ともに相手方のイメージを崩すためにかなりえげつない攻撃をお互いに加えていた。

結局「変化」を求める米国民は46歳のクリントンが大統領に選んだ。それにしても、ゆうに一年に互る選挙戦、そして政権担当者の交代にかかるエネルギーと時間の浪費には首を傾げざるをえない。周知のとおり米国の閣僚、各省の次官、次官補等主要ポストは基本的にポリティカル・アポイントメントで、政権交代ごとに人が代わっていく。その任命には議会承認を要するものが多く、これがまた大変な時間と手続きを要するため、なかなか物事が進まなくなってしまう。改革に意欲を燃やして大統領に就任したクリントンも、人事手続きの遅れには業を煮やしていたようである。

就任後半年たち新政権の現状はどうかと言えば、財政赤字削減を目指した94年度予算案がやっとのことで議会を通過し、公約の経済復興はこれからといったところだろうか。また、ボスニア問題などで見られたとおり、外交面での切れの悪さを感じられないでもない。というよりも、クリントンはまだ外交



に本腰を入れていない（あるいは入れる余裕がない）、というのが大方の見方である。

ところで先のサミット訪日で、アメリカのマスコミがクリントン夫妻に対する日本人の見方を相当気にしていたように思われたのは以外であった。自分の学生時代にはアメリカといえば兄貴と呼ぶにもおこがましいほどの大国であったが、いつのまにか日本が弟分になり、そして「グローバル・パートナー」にまで成長してしまった。自分が係ってきた仕事からみても、湾岸危機、国連PKO、中東和平問題など米国と日本との協力、協調の機会は益々増えてきており、世界における日本のプレゼンスとともにその責任をワシントンで感じるこの頃である。

青梅マラソン，完走

エービーシー商会 総務部
佐藤誠一郎（昭和53年卒）

「円谷選手と走ろう」という呼びかけで昭和42年にスタートした青梅報知マラソンは今年で27回大会を迎え、2月21日に開催され、私は30KMのレースに参加して、2時間33分27秒の公認記録で完走致しました。青梅の30KMは前シーズンの長丁場の本命のレースとして、昨年末頃からそれなりの長距離練習をやってきました。そして本大会では5KMあたり25分前後のイーブンペースで走れ、練習の成果が発揮できて、それなりの達成感を得てゴールしました。

さて、私は現在建材メーカーに勤務する傍ら、マラソンアカデミーというランニングクラブに所属していて、週に2、3回クラブの練習会や個人でも走っています。今は市民ランナーの大会参加が盛んで、私もいろいろな大会に参加して元気に活躍しています。



▲27回青梅マラソンにて

21世紀への課題

東京純心女子短期大学 英語科講師

増田 光 (昭和59年卒)

84年に卒業後、集団就職と言われながら80—50/51クラスから4人で入社した東芝を1年3ヵ月で退社。その後、伝統芸能の狂言の稽古をしたりしながら舞台芸術の勉強を続けています。90年からは上智大学でも教鞭を執らせて頂いておりますが、現在は東京純心女子短期大学英語科の専任講師を務める傍ら、兼任講師として英語学科の「アメリカ演劇映画論」を担当しています。主にアメリカ演劇の映画化について研究しているのですが、「20世紀の映像表現は人間の視野をどれだけ拡大してきたか。または、人間の視野の拡大が20世紀の映像表現にどれだけ反映されているか。そして20世紀とは何だったのか」ということに強い興味を抱き、アメリカ映画史、美術史に研究対象を広げたいと思っています。大学の存在自体が不確かな昨今ですが、21世紀に40歳を迎える

私としては、21世紀を生き抜くためにも、映像（視覚）表現を中心とした芸術的人文科学に賭けてゆきたいと思っております。



▲セントラル・パークにて

10号館英語学科室より

英語学科事務室勤務

本田由美

英語学科オフィスの机を前にテンと座っている今、まだまだ解らないことばかりの上、体内時計のゆっくりペースと、世の中の慌ただしさとのギャップで顔が険しくなっている。7月に来たばかりの新前で、これから先何が起きるのか全く予想もつかないという不安もあり、仕方がない事かも知れない。でも、本来私は、人と接することを最高の喜びとする人間で、現に学科の素晴らしい個性豊かな先生方や学生さんたちとの出会いは楽しい。

見かけは少々きつくても心は優しいつもりなので卒業生の皆さん、母校にいらっしゃる折には是非とも学科事務室にもお立ち寄り下さい。私にもどうぞ色々なお話をきかせて下さい。上智大学特有の校風、先生方と学生・卒業生との温かいつながりを間近に感じ、又人との出会い等に依って心を豊かに暮らす事で、いつかきっと穏やかな表情を取り戻そうと思っている今日この頃、どうかご協力宜しくお願い

致します。私も早く仕事に慣れて、少しでも皆様のお役に立てるように心がけています。



新規加入常任委員のお知らせ

5月30日に行われた定例総会で、英語学科同窓会会則に基づき、下記2名の常任委員の新規加入が承認されましたので、ご報告致します。

佐藤誠一郎 (昭和53年卒)

増田 光 (昭和59年卒)

決算・予算に関する報告

決算・予算に関する報告1992年度決算および1993年度予算が1993年5月30日に開かれた総会において承認されました。

1992年度上智大学同窓会収支決算報告書

(単位:円)

科 目	予 算	決 算	備 考
取 入			
1. 前期より繰越	2,773,560	2,773,560	1991年度より繰り入れ
2. 入会金	100,000	129,000	1,000円×129人
3. 会費	2,200,000	2,677,000	2,000円×1,338.5人
4. 受取利息	140,000	174,000	普通預金, 郵便貯金, 債券等
5. 雑収入	0	6,876	一時預り金等
合 計	5,213,560	5,760,446	
支 出			
1. 名簿作成積立金	500,000	500,000	1994年度発行
2. 名簿作成準備金	10,000	0	
3. 会報作成	400,000	160,820	会報15号発行
4. 会報郵送料	600,000	288,000	会報15号分
5. 会報発送料	170,000	38,300	会報15号封入・局出し
6. パーティ補助金	100,000	94,273	総会後パーティ
7. 女性セミナー	110,000	110,000	講師への謝礼等
8. 常任委員会運営費	50,000	12,875	会議費
9. 事務処理費	350,000	166,147	封筒・振込用紙印刷, 宛名ラベル等
10. BTF 講座運営費	200,000	100,000	講師交通費, 文書費等, 講義記録等
11. SELNET 準備金	50,000	62,418	案内書・申込用紙印刷
12. 講演会	50,000	0	
13. 下備費	2,623,560	30,600	故クラブ先生へ生花, 預り金返還等
合 計	5,213,560	1,563,433	
差引収支		4,197,013	1993年度に繰り越し

会計監査委員石川雅弥(40年卒) 監査済み(1993年5月30日)

1993年度上智大学英語学科同窓会予算

(単位:円)

科 目	予 算	備 考
取 入		
1. 前期より繰越	4,197,013	1992年度より繰り入れ
2. 入会金	100,000	1,000円×100人
3. 会費	2,000,000	2,000円×1,000人
4. 受取利息	120,000	普通預金, 郵便貯金, 債券等
5. 雑収入	0	
合 計	6,417,013	
支 出		
1. 名簿作成積立金	500,000	1994年度発行
2. 名簿作成準備金	41,000	不明者リスト印刷
3. 会報作成	500,000	会報16号, 17号発行
4. 会報郵送料	630,000	会報16号, 17号分
5. 会報発送料	80,000	会報16号, 17号封入・局出し
6. パーティ補助金	100,000	
7. 女性セミナー	110,000	講師への謝礼等
8. 常任委員会運営費	50,000	会議費
9. 事務処理費	350,000	封筒・振込用紙印刷, 宛名ラベル打ち出し
10. BTF 講座運営費	200,000	講師交通費, 文書費, 講義記録等
11. 講演会	50,000	
12. 予備費	3,806,013	
合 計	6,417,013	

1993年度定例総会報告

1993年度 SELDAA 定例総会は、去る5月30日午後、上智大学407教室で開催された。総会は、議長、書記の退会に続いて議事に入り、過去1年の活動報告、決算・予算が上程され、各々可決承認された。

その他主な議題並びに決議内容は、次の通り。

「会則第10条(常任委員の定数)の一部変更の件」

これは、常任委員の定員を現在の10名から15名に増員したいとするもので、会長より「現在の委員に、より若い世代の委員を加え、できるだけ広い層からの意見を会の運営に反映させたい」との趣旨説明があり、討議の上、承認可決された。

「野口奨学基金の件」

野口奨学基金の今後の運営につき、会長より次の如き提案があった。「先般、草深学科長より、野口基金とブリタニカ基金(英語学科の教授が、ブリタニカの出版に協力して得た資金をプールした基金)を併せて一つにし、奨学金としてより有効に活用したらどうかという話があった。二つの基金が一つになれば、資金規模も大きくなり、より有意義な運用が計れると思う。一つにすることに賛成が得られれば、英語学科、イエズス会、SELDAA からの三者から、各2名、合計6名の運営委員を選出し、その運営に当たってもらったらどうか。」

この提案につき、質疑応答があった後、①野口基金とブリタニカ基金を一つにして、新たな奨学基金とすること、②6名の運営委員で新たな基金を運用すること、につき採決の結果、全会一致で承認可決された。

質疑応答の中で、新たな奨学基金の名称に、できれば「野口」先生の名を残したい、基金の使い方としては、学資の援助もさることながら、特別の分野の学問や研究をしている学生に、その学問を奨励したり、研究成果を認めるといった意味で、奨学金を与えるようにしたらどうか、といった意見が出された。これらの意見もふまえて、SELDAA として、関(会長)、小林(事務局長)の両氏を新たな基金の運営委員として選出した。

『訂正とお詫び』

前号 SELDAA No. 16で紹介させていただいた【1992年度 BTF 講座秋季報告】の中の、石倉洋子氏の役職に誤りがありましたので、お詫びして訂正させていただきます。正しくは、青山学院大学国際政治経済学部教授です。